中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第20巻 第1号（2021）2－6頁

中京大学心理学部・心理学研究科の誕生について

心理学部・心理学研究科紀要編集委員会

2020年で中京大学心理学部は学部創設20周年になる。今回，この節目の年に日本で最初の心理学部設立について記事を掲載し，心理学部の原点にあたる学部設置趣旨や当時の社会的期待などを振り返る機会としたい。

そこでまずは心理学部設置認可申請書の記述から心理学部設置構想の背景についてみていく。

⑴　心理学部設置構想にいたる背景

1966年に創設した中京大学文学部心理学科は，実験心理学とその実践分野である応用心理学の二本立てでスタートした。その後，社会や学生の要望に基づき1970年以降に臨床心理学が加わることになる。心理学科に専攻やコースを作らなかったのは，狭い分野に偏らない，心理学全般にわたる教育を目指すという意図があった。中京大学心理学教室は，1971年に大学院修士課程を，1978年には大学院博士後期課程を設置するなど着実に実績を積んできた。

1990年代から心理学に関する社会的期待が高まってきた。一つは平成10年５月14日（1998年）開催の大学設置・学校法人審議会大学設置分科会において，従来看護系，福祉系等に限られていた設置審査の抑制に関する例外措置に「スクールカウンセラー（臨床心理士等学校臨床心理に関する高度の知識，経験を有する専門家）」の養成に係るものが追加された。また心理学に関する新しい学部の必要性は当時の日本心理学会のシンポジウムの中で取り上げられてきた。平成11年（1999年）に開かれたシンポジウム「わが国における心理学研究の独自性を求めて」において，心理学を学ぶために哲学を受験せざるを得なかった経験談にはじまり，日本の心理学史を専門とする研究者が「心理学部が開設されるまでは……」の言葉によってしめくくられた。

このような社会背景があり，中京大学において心理学部の創設構想があがった。当時の文学部心理学科空井健三先生と森孝行先生が中心となりカリキュラム設計など創設準備にご尽力された。次に心理学部・心理学科設置の趣旨について中京大学広報第118号（1998年）の記述からみていく。

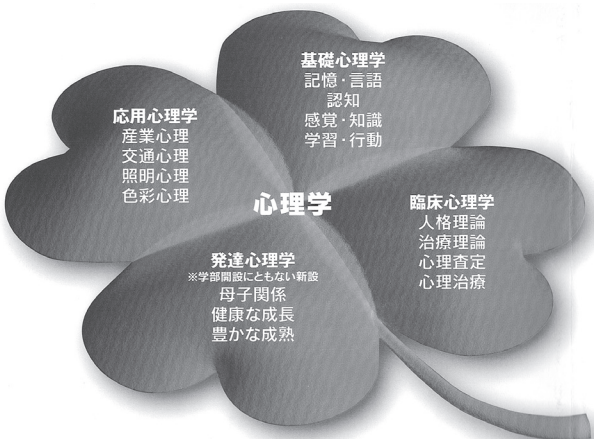
⑵　心理学部・心理学科設置の趣旨

心理学は哲学から分かれた経緯から大学教育では文学部で行っているところが多かった。しかし，現在の心理学は科学としての心理学をめざし，文科系と理科系をまたがる，直接人間を対象とする独自の学問を形成している。

本学が，心理学科を改組，独立させて心理学部を創設する主な目的は，①新しい時代に対応する心理学の総合的一貫教育を行って，②現代社会が必要とする人材を育成するためである。

昭和41年（1966）に設立，多くの優秀な人材を送り出してきた文学部心理学科は，３つの領域に重点を置いた総合的な教育，研究を行ってきた。知覚・学習・記憶・認知など人間行動の理解のための「基礎心理学」，照明・交通・産業などの分野で安全や快適さの促進に貢献する「応用心理学」，様々な不適応の問題に対処する「臨床心理学」である。心理学部への改組にあたっても，この基本構造は維持し，その上で，母子関係・健康な成長・豊かな成熟など全てのライフスパンを研究する「発達心理学」のもう一本の柱を立てる。心理学教育のさらなる充実を図るためである。

日本の大学で初めてとなる心理学部は，心理学の中のごく狭い領域に偏ることなく，総合的に，深い教育を行っていくことを特色に「こころの専門家」を養成し，社会的要請に応えたい。　（中京大学広報第118号：1998年）



4領域のイメージ（中京大学心理学部創設時のパンフレットより）

学部設置の趣旨から直接人間を対象とする独自の学問としての心理学のアイデンティティと4領域を総合的に深い教育を行っていくことで社会的要請に応えたいという教員スタッフの熱意を感じることができる。

学部名を「心理学部」としたことも意味があった。心理学部設置認可申請書によれば，高校生・学生の立場に立ってみると学部・学科の複合的・抽象的な名称に戸惑いやすい傾向にあると指摘されている。我々が物の名称を覚えることで自分をとりまく世界の認知の働きが促進されていく認知発達の働きから見れば，「心理学部」というシンプルで明快な名称は「大学で心理学を学ぶ」という学生のアイデンティティ確立の一助になればとの願いでつけられたということも知ることができた。

2000年当時の心理学に対する社会期待について具体的な様子が，中京大学広報第122号（2000年）に掲載されている心理学部初代学部長へのインタビュー記事に書かれている。

⑶　心理学部創設時の社会的要請と教育への期待

現代は，社会の組織が複雑になり，情報化，長寿化，少子化などの変化も激しいため，変化についていけず，不適応を起こす人が増えています。「こころの時代」といわれて，こころの問題がクローズアップされ，心理学の専門家に対する需要と，問題解決への期待が急激に高まっています。

子どもたちのこれまでにない問題行動も，私たちの大きな悩みの一つになっており，ここでも心理学に対する期待が膨らんでいます。子どもたちの心に，どうしたら豊かな人間性を育むことができるか，いかにして健やかな成長をさせることができるか，その解決の一端が心理学に託されています。スクールカウンセリングは今後ますます重要になってくるでしょう。

大人の社会も同様で，こころに悩みを持つ人は増える一方です。心理学は産業カウンセラーなどの育成の要請にも応えなければなりません。　（中京大学広報第122号：2000年　空井健三先生へのインタビュー記事）

日本で初の心理学部創設には，学内外からも大きな期待がよせられた。次に日米心理学会会長の本学表敬訪問（中京大学広報第121号：1999年）と心理学部開設記念講演会（「21世紀の日本の教育」河合隼雄氏）の記事（中京大学広報第125号：2000年）を取り上げたい。

⑷　日米心理学会会長の本学表敬訪問

訪問したのは，米国心理学会会長，リチャード･M･スウィン氏（コロラド州立大学教授）と日本心理学会会長，東洋氏（文教女子大学教授）。本学で開催された日本心理学会第六十三回大会（大会長・森孝行教授）に出席，梅村総長・理事長，北澤学長を表敬した。

スウィン会長は「米国では心理学への要請が多いが，心理学会もその要求を応えるため努力している。中京大学

が社会の要請に応え，心理学研究の新たな体制をつくるのは誠に喜ばしい」と心理学部発足への期待を表明した。

東会長は「日本では心理学は学科としてしか存在してこなかったので，ある大学の心理学科は応用面，別の大学は基礎心理と，総合的な研究・教育が行われにくかった。中京大学が心理学部を開設して基礎，応用，臨床，発達の各分野を統合して新しい教育・研究のシステムをつくるのは，心理学の発展にとって大きなプラス。中京大学がよい先例となる。開設おめでとう」と早々と祝意を表した。（中京大学広報第121号：1999年）

北澤学長（右端）、梅村総長・理事長（その左）を表敬訪問した東・日本心理学会会長（左端）とスウィン米国心理学会会長

⑸　心理学部開設記念講演会―「21世紀の日本の教育」

国際日本文化センター所長河合隼雄氏の記念講演は，450人が出席し，「21世紀の日本の教育」をテーマにした話に聞き入った。

講演では，21世紀を直前に日本の社会，文化，日本人の心が大きく変わろうとしている現実に言及，日本が国際社会の中で生きていくためには，みんなが直面する問題に取り組み，考えていく必要があると強調した。問題の最も大きなものが教育であるとした上で，「日本の教育は平等を大事にしてきた。平等はいいことだが，秀でた子の頭を押え付ける欠点もある。これからは個性を大事に，長所を伸ばす教育が求められる。しかし，アメリカのように生まれてから死ぬまで競争，競争といった社会がいいかどうか。日本人に合った新しい倫理観，宗教観を確立しなければならない。そうした課題を背負いつつ，21世紀の日本の教育はどうあるべきか考えていく必要がある」と話した。（中京大学広報第125号：2000年）

心理学部開設記念講演会で話す河合隼雄・国際日本文化研究センター所長

2002年には心理学部のコースを基礎として，その方針・内容と整合性を持たせることを趣旨として文学研究科心理学専攻を改組して心理学研究科が創設されている。合わせて心理学研究科の開設についての話題を取り上げ

る。心理学研究科の開設目的について，心理学研究科設置認可申請書から紹介していきたい。

⑹　心理学研究科の開設の目的

・実験・応用心理学専攻

20世紀後半は，心理学の基礎領域において，感覚・知覚・感情・学習・認知・行動などの基本的心理過程の解析が進み，その成果が心理学のみならず隣接諸分野の学術発展にも貢献してきた時期である。そして同時に技術進展に伴う環境改変が人間―環境系への心理的適応という新たな課題を生み出した時期でもある。例えば医療ミス・交通事故などは，注意や慣れなどのヒューマンエラーの心理的問題と深くかかわっており，その解決には人間の心理的過程に照らした具体的な提案が求められる。

これらの両問題を対象とするために，意識発生から行動発現に至る基本的心理過程の解明をめざす「実験心理学研究領域」と，そのような基礎研究の成果を活用して現実的諸問題の解決を図る「応用心理学研究領域」を合わせた「実験・応用心理学専攻」を置いた。専攻の教育目標は，基本的心理過程に関する学識をもち，その応用によって快適で安全な人間環境系の設計に寄与する学術研究者および専門実務者を育成することである。

・臨床・発達心理学専攻

著しく変貌する現代社会は，個人の社会生活に多大な影響を及ぼし，そのことが文化的・社会的行動に多様性を生み出している。心理的適応が困難になることも多くなる。このような事象に対して臨床心理学は専門的知識と経験に基づいて支援を行ってきた。

一方，発達心理学は，人間の生涯にわたる発達事象の理論化と事象発現機序の解明を目指すものである。そして近年その動向は，発達事象を人間の日常生活に積極的に見出そうとしている。

心理臨床活動に従事する者に，事象理解の基礎を与える領域の１つが発達心理学であり，臨床心理学と緊密な関連性を持つ。しかし従来，発達事象の原因探求を目指す発達心理学のアプローチと個の理解を通じて適応を支援する臨床心理学のアプローチとがともすれば乖離しがちであり，両者の連携が充分といえない状況であった。しかし，近年の学問的動向に即して心理学における両領域の連携協力を促進することでさらに高い資質を持つエキスパートを養成することが急務とされる。

専攻の教育目標は，心理学全般にわたる広い学識をもち，適応事象の基本を身につけた専門実務者および学術研究者を育成することである。

心理学研究科開設については，中京大学広報第130号（2001年）に心理学研究科初代研究科長へのインタビュー記事がある。これからの社会で心理学が貢献していくために必要な視点が述べられている。

⑺　心理学研究科開設にあたって

・いま心理学に求められていること

心の問題に限らず，現代社会が抱える諸問題は，いずれを取ってみても，単一の学問分野の力で解決できるものはありません。ですから，国内外の学術動向は，分野相互の連携協力の方向を目指しています。

誕生から一世紀あまりの間に著しい発展を遂げてきた心理学は，認知・行動・発達などの基本的心性を扱う領域，錯誤・障害など適応上の問題に関わる領域などに細分化され，それぞれ固有の課題を達成することに努めてきました。その結果，心理学の全体像を的確に把握することが極めて難しい現状を招いています。

心は複雑な事象であり，心理学が他の諸分野との連携においてその役割を担うには，まず心理学諸領域の調和ある発展が欠かせません。心理学の教育研究の総合化と高度化が急務といってよいでしょう。心理学研究科は，過去の実績を踏まえ，この方向を目指します。

（中京大学広報第130号：2001年　辻敬一郎先生へのインタビュー記事）

2000年に日本初の心理学部が中京大学に誕生し，注目を集めた。その後20年たった2020年４月現在，日本で心理学部がある大学は22大学となる。21世紀を生きる今，私たちは心理学における教育・研究の発展に向けて精進し，さらなる社会的貢献に努めたい。

付記

本記事を作成するにあたって以下の皆様の取材協力およびご指導をいただきましたことを深く御礼申し上げます。

中京大学心理学部元教員スタッフ：八尋華那雄先生（中京大学名誉教授），牧野義隆先生（中京大学名誉教授），辻敬一郎先生（元中京大学教授），田形修一先生（広島国際大学教授）

中京大学元職員：鈴木綱男様，村瀬勝彦様

各部局：心理学部事務室，学園史室，広報課，入試広報課，大学院事務課